「M情報デスク」サポート団体
NPO 法人百人の会　救う会大阪
秋田三輪さんを救出する川西市民の会
米国に原爆投下謝罪を求める会
スパイ防止法の制定を求める会
日教組の違法行為を追及する市民の会
竹島を奪還する会・関西
靖国神社に眠る御霊に感謝する会
大阪の公教育を考える会、他

MASUKI INFO. DESK
FIGHTING REPORT

関西より発信！

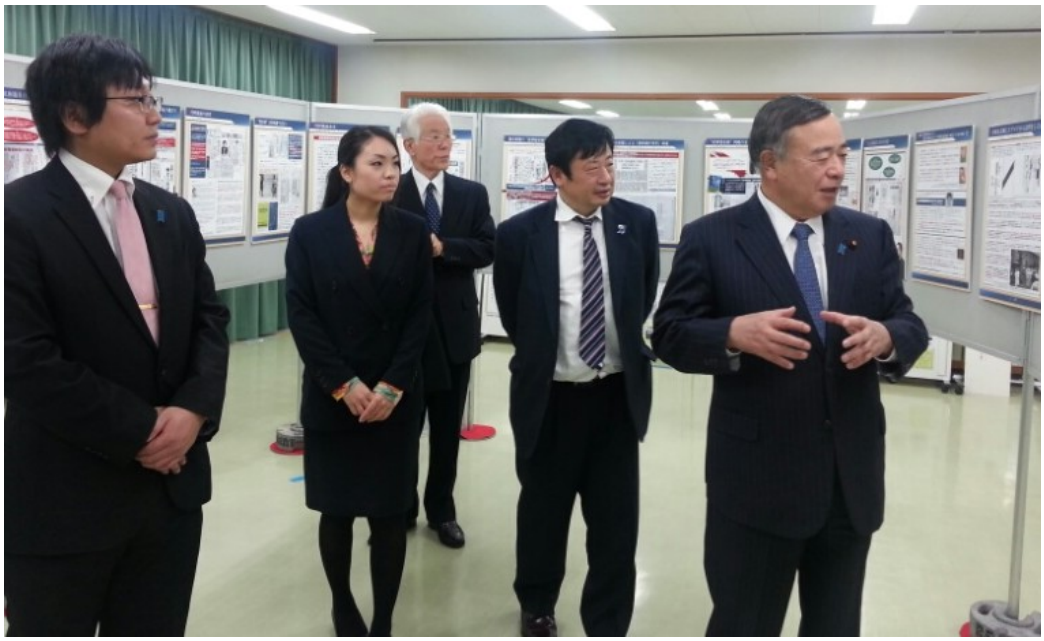
No. 152
【発行・編集】
MASUKI情報デスク
増木直美
大阪府豊中市上新田2-6-25-113
TEL　090-3621-1509
FAX　06-6835-0974
http://mid.parfe.jp/
mid@jewel.ocn.ne.jp

# 宝塚には慰安婦の真実を伝える義務がある

主催：OAJPP（オージャップ）
マスキ：「ジャップ」が気に入らね～～
モリタ：細かいことぐちゃぐちゃ言うな！　で始まった今回の作戦、はっと気がついたら「百人の会」の名前が共同主催で載っていた。まっ、いいか。

みなさんもご存知のとおり、全国で一番最初に市議会として「政府に従軍慰安婦問題の真摯なる対応」の意見書を出したのは兵庫県宝塚市です。だから、宝塚市には慰安婦の真実を伝える義務があるわけです。河野談話の撤回も宝塚から発信する責任があるのです。

というわけでOAJPP（「オージャップ」で検索：代表　森田章彦氏）が「捏造・検証　従軍慰安婦真実のパネル展in宝塚市（3月8、9日）、同時開催、前文部科学大臣中山成彬衆議院議員のご講演、杉田水脈衆議院議員のグレンデール市視察報告会（3月8日）」を行ないました。パネル展には数百名。講演会にも約４００名の参加者があり、人口２０万程度の宝塚市ではビックリ。先生のご公演は「【中山成彬】講演会　従軍慰安婦の真実」で検索ください。ユーチューブにアップしています。


パネル展視察の中山成彬前文部科学大臣　左より今倉辰則、大上舞子、池田博義、森垣雅夫

また、講演会後の懇親会では、天国からタカジンが、と思うほどそっくりの、読売TV「そこまで言って委員会」の井関チーフプロデューサーも御参加。（本当にそっくりなんです！）

講演会の最後に**森田章彦OAJPP代表の挨拶**

「「オージャップ」って、何だと思われますよね。これは、英語のObjection to Anti-Japan Power Partyの頭文字です。Anti-Japanというのは所謂『反日』思想、それにObjection　反対します。漢字で書きますと、反・反日会になってしまい、わけがわからないので、夢は大きく、グローバル的に英語で行こうと決めました。

さて『未来の子供たちへ』というタイトルをつけております。これは何かと言うと、今我々が子どもたちに対して『つけ』を残さない。未来の子供たちが平和で、みんなと仲よくやって行けるような時代を迎えれるように、何か草の根運動をやっていきたい。私は何かを責めるために始めたのではありません。未来の子供たちが『日本に生まれてよかった。』諸外国の人も『日本っていいな』と思える街を作っていきたい。」と語りました。私（増木）を仲間に入れていただき、感謝！

さて、まずは3頁の署名にご協力頂きたい。そもそも安倍さんとて河野談話は苦々しく思っている。しかし、自民党の大先輩のやったこと。そう簡単に「見直しします。」と言えるわけがない。〇〇だから見直しました。という大義名分がいるわけだ。中山成彬先生が何をしたいのか、先生の胸中をお察ししましょう。

**【中山成彬、3/5FBより】**

「慰安婦問題は身内の河野氏を庇い、国会招致も認めない自民党にはできない相談であり、まして他の野党には望み得べくもない事です。私が自民党を除名され、やっとの思いで維新から当選してきたのはこの為だったのかと、ふと思う時があります。汚名を着せられた先人の霊達が私を突き動かしているのかも。」

また、松浦芳子杉並区議ら、草莽地方議員も署名の集約をされているのでご紹介したい。

【「百人の会」トップ頁、上から10cm 位の案内文字から入って！

「M情報活動報告」編集指針；政治や国際問題、市民活動に全く無縁だった一般の人達に、「おばちゃん語」で政治を届ける

# カウンターを考える・一般の人たちはどう見るか
## ―OAPP 森田章彦代表の対応　百人の会事務局長　増木重夫

さて、本題に入ろう。前頁の要領でパネル展が行われた。パネル展二日目、昼頃よりパネル展会場の最寄りの駅、阪急逆瀬川駅で、左巻き軍団が「原発反対」のビラまきを始めた。その情報をキャッチしたわが陣営の若手軍団数名が駅に飛んで行き、左巻きを追い出し「河野談話見直し」の署名を始めたのだ。少々の小競り合いもあったような。

　要は左巻きに対しカウンター攻撃をかけたわけだ。そして左巻きを追い出すという大成功をおさめた。

　ところが、森田代表はカンカン。私も森田代表ほどではないが、いかがなものかと思った。「お前も昔やっていたじゃないか。」と言われると反論しにくいが。しかし、あえて反論すると、昔はカウンターをしても双方のんびりしたものでヘイトスピーチなど縁遠いものだった。

　ところが最近のカウンターはヘイトスピーチは言うに及ばず、罵声のあびせっこ。一つ間違うと暴力団の抗争並み。いつからかわからないが下品の極みになってしまった。

『カウンター＝ヘイトスピーチ＝在特＝無法集団』という方程式が出来上がってしまったのだ。それが事実であろうがなかろうが、マスコミをはじめ一般の人はこのような見方をすることは否定できないだろう。

　我が陣営の若手軍団は自分たちに正義があると信念を持っている。私もその通りで彼らの正義は信じる。しかし、正義がどこにあるかという話と、一般の人からどう見えるかは別問題。一般の人からは在特の方程式『カウンター＝無法集団』にしか見えない。そうなると『OAPP＝無法集団』になってしまう。

　要は、正義さえあれば何をしてもいいのか。ということになってしまうのだ。もしこの時私がそこにいたら、やはり、駅へカウンターに行くのは止めたと思う。

　だから、森田代表のお怒りは実にごもっともなのだ。私は特に意識しているわけではないが、無意識のうちに『カウンター＝無法集団』と感じていたのだろう。

　我々保守軍団は、こと『正義』に関してはだれにも負けない自負がある。もちろん私もそうだ。ところが、『正義』の表現も、一つ間違うと『ヤカラ』にしか見えない。これが現実であることに疎い。

　そうなると「そもそも運動とは何。」というところに行き着く。カウンターのプラスとマイナス。マイナスは今お話ししたように、『輩』『差別主義者』のレッテルを貼られ、貼られてしまったら最後、そう簡単には消得ない。「愛国からだ。」「差別はしてない。」といくら叫んでも後の祭り。じゃあプラスは何か。はっきり言って自己満足だけではないか。

　カウンターや、ヘイトスピーチで何かが変わったか。自己満足で満足しているようでは「幼稚」と言わざるを得ない。もっと結果を考えるべきであり、結果に責任を持つべきだ。プラスマイナスを計算し、結果、プラスが多いならそれも結構。しかしマイナスなら、多少のプラスがあっても絶対やるべきではない。多少のプラスなど『正義だ！』と叫ぶ言い訳にもならない。まして自己満足なら論外だ。

　そんな計算ができないようでは、とても左翼陣営に勝てないだろう。

　カウンターは街頭のみならず、ネット内においても全く一緒。

　それで、9日だが、カウンター組はパネル展会場に連れ戻され、「反省の間」に押し込められ反省タイム。案の定左巻きの偵察隊はパネル展会場に現れた。会場にカウンター組がいたら、真に『OAPP＝森田章彦＝森田氏の会社＝在特＝無法集団』になってしまう。森田氏は宝塚でレンタル会社を経営し地位も名誉もある。街にそれだけの貢献もしてきた。その全てが一瞬に吹っ飛んでしまう。若手組はどこまで考えてやったのかは知らないが、責任取れるのか、数十人の社員を養えるのか。

　また、今回は地域ミニコミ紙『テクテク』（8万部）にはがきほどの告知記事を掲載し、カラーのチラシも1万枚程ポスティングした。森田氏は笑っているがその経費は数十万円だろう。今回会場に来た人は入場無料で数百人。でも、これらの媒体を見た人はその数十倍はいるだろう。これが運動だ。

　カウンターは「労力と効果」を考えて決して利口な方法ではない。まして、人間一番大事な「品格」にまで傷がつく。純粋さは肯定するが、それだけではダメだ。まして、一つ間違うと刑事や民事事件に発展するリスクもある。「カウンター＝行動」でもないし、「カウンターの激しさ＝愛国心の度合い」でもない。

　我々の運動の成果としてハッキリ言えるのは、サヨクをいかに我が陣営に引き入れるのか。カウンターなどやっていたら、ますます彼らは引いていき、我が陣営には自己満足だけが残ることになるだけだ。理論でいくら買っても「それが何、それがどうしたの」

　さらに言うなら、「服装」。一般の人からどう見えるか服装は最も大事要素だと思う。ジャケットにネクタイが一番いいのだろうが、せめてポロシャツ程度は。Tシャツはダメ。襟がない。

　年配諸兄の7割が合格と言ったら合格だ。

　しばしば日本会議の批判をよく耳にする。「彼らは行動しない。」と。彼らは街宣等に来ないのではない。物騒な匂いがするから来ないだけで、根性がないわけでも愛国心がないわけでもない。物騒な空気と一線を引きたいだけで、そんなこと当たり前だ。デモや街宣が始まった12～3年前は、日本会議のおじいちゃん達もデモや凱旋によく参加されていた。彼らを批判する前に物騒な匂いを払拭する方が先ではないか。

　昔はヘイトスピーチなどという言葉はなかった。この言葉、イメージや概念を定着させられてしまった。在特の責任は重い。また、定着させた左翼は賢い。

　よく、「私は在特の会員になった覚えはない。」と聞く。在特は、本来固有名詞。ところが最近はデモや街宣をする人の総称、普通名詞になってしまったような気がす。極めて迷惑この上ないが、これも現実だ。

　街宣、デモ等の演説、シュプレヒコールの言葉使いは細心の注意を払わないといけない。今まで許された言葉でも、今はゆる浅れない。一般の人は『街宣、デモ＝無報酬団』と思っている。粛々と活動を行い、一般の人の信頼を得るまでは『忍』の一字だろう。「信頼してくれる人もいる。」「頑張って欲しい」という人もいる。この程度では合格と言えない。耐えよう！

# 「慰安婦問題」に関する河野談話の見直しを求める署名

内閣総理大臣　安倍晋三殿

| 氏　　名 | 住所（都道府県から記入） |
|---|---|
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |
| | |

１　この署名用紙は、お手数でも右端を切り、下記、『MASUKI情報デスク』までご郵送、またはFAXでご送付下さい。

２　必要枚数コピーしてください。

３　この署名は『MASUKI情報デスク』で集約し、衆議院議員中山成彬事務所を通じ、内閣に提出されます。

４　一次締切　３月末日

MASUKI情報デスク
代表　増 木 直 美
大阪府豊中市上新田2-6-25-113
ＴＥＬ　090-3621-1509
ＦＡＸ　06-6835-0974

# 教育について思うこと15連発

H26-2-23 京都北山細野の神主 中村重行

## 師範学校制度の復活を

2014年02月23日

義務教育の徹底強化によって日本の教育は立て直すことが出来ると考えます。昔の学校の先生は師範学校と言う先生専門の養成学校卒業生が多く居られました。後の学芸大学や教育大学と名を変えて今も存続していますが。

今はどこの大学の学部でも教職課程をとれば先生になる資格はとることが出来ます。だから、学生達は立派な先生になることを目指して教職課程をとっているのではありません。

単なる労働の報酬を得るために教職者になるのです、始めから先生と言う聖職を目指して学んだ人ではありません。特に、義務教育期間の先生はその子の一生に大きく影響する重大な役割があるのです。

人生の始めの部分で反日的な日教組やカルト教団大学の出身者に我が子を託すと言うことは現実を知れば親として耐えられないことです。

特に小学校の場合は担任の先生の影響は大きなものがあります。私にとって小学校と中学校の最終学年の担任に良い意味で人生を変えられました。小学校の久保先生、中学校の芦川先生のおかげでその後の私の人生が形成されたと思って感謝しています。

何が違うか？簡単なことです。お二人の先生方は子供の個性を見抜き、理解してくださいました。

子供にとって自分を理解してくれる人が親以外に居ると言うことは大感激であり、大安心なのです。今では1学級の生徒の数が多すぎるだの、30人学級や35人学級にしろと先生達はおっしゃっていますが当時は1学級50人以上が普通でした、そのうえ中学校の時には1学年何と12組もありました。それよりも驚くことには補導を担当されている先生はほぼ全校生徒を把握されていました。それでも子供の一人一人の個性を把握して教育されていたのです。今もそのような立派な先生は居られるし、目指す先生も居られるでしょう。一時流行った「デモ、シカ先生」（懐かしい言葉ですが）では無くて聖職者としての先生の養成を世の親たちは国に要請すべきです。それには単に大学を出て知識の切り売りをするのではなく立派な子供を育てると言う使命感を持った先生を養成する「師範学校」の復活を検討して欲しいと思います。

「出藍の誉れ」と言う言葉こそ教える者の誇りとして欲しい。

能力ある弟子の梯子を外したり、弟子の業績を自分の手柄にする大学教授の見苦しさを見聞きするにつけ、初等教育者の聖職者としての地位を確立することの大切さを感じるのです。

## なぜ多くの若者が大学に進学して青春を浪費するのか？

2014年02月22日

神道では人は神のミタマを頂いてこの世に生まれて来ます。そして、一生をおえればミタマは神の元へ戻ります。前世も来世もありません、今生（コンジョウ）この世に生きている間、この世）が総てなのです。だから、人は一生を大切に生き抜かねばなりません。それが神さまの御意思なのです。人の命は限られています。人それぞれに歩む道も違います。戦後、大学さえ出れば楽な生活が出来ると錯覚してしまい大学に進学するようになりました。大卒という看板が効果があったのでしょうか？戦前でも「大学はでたけれど」という嘆き節はありました。

親の見栄、本人の見栄、肩書きの好きな日本人になってしまったのです。肩書きで飯が食えたのは昔の話で、今や大卒も非正規社員やパートタイマーになるしか仕事がないのでしょう。この現象は大卒者の質が落ちたことを意味しているのです。専門知識も会社の将来を託せるような能力を身につけずに卒業して来た大卒者が多いことを意味しています。

人間として、日本人として神さまからのミタマをもらって生まれて来たものは、自分の人生に責任を持って進まなければなりません。しかし、現状は本人も親も、将来を他人の手にゆだねているのです。一流大学にさえ入れば、一流企業に入れて、人生は安泰だと言うはかない神話に騙されて。

昔から、自分の能力以上に出世した奴は居ません。一時は羽振りが良かっても、能力以上のポジションや報酬を得ても、人生の途中で挫折してしまうものも、晩節を汚してしまう者も沢山居ることも大人は経験していることなのです。なぜ、親や祖父母はそのことを子供たちに教えないのでしょうか？団塊の世代以後の親達は完全にその辺りの判断力を失っています。

今、20歳から40歳代の子育て真っ最中の親達は子供たちがこれからの日本で、世界で、生き抜ける教育をしてやって欲しいと思います。総ての子供たちが大学を出て大企業に就職したり、国家公務員になれるわけでもありませんし、この道がこの子のために最適な道ではないことは本人と親が一番判断出来るのですから。義務教育は中学校で終わっているのです。中学校まで学んだら大人の仲間に入れて実業の道に進める資格が着いたと判断しているのです。そのための義務教育期間なのです。大人としての資格を得たのです。昔は15歳で元服式を迎えたのです。この歳に大人の仲間入りをしたのです。

武士の子は戦いの場に出る歳になったのです。だから、子供の頃から人生に正面から取り組んだのです。身も心も大人だったのです。今の子供も15歳で成人になっているのです。それを20歳まで成人になるのを延ばしたばかりに幼児還りしてしまって成人式では暴れるぐらいの事しか出来なくなってしまったのです。

一番学ばなければならない時期、一番身体を鍛えなければならない時期を「ユトリ教育」などというバカ学者のホザクことを真に受けて進めて来た文科省や日教組の怠慢を今改めなければ日本人は腑抜けたままになってしまいます。

義務教育期間を有効に、知識を学び、身体を鍛えることに専念しなければ、府抜けた若者を軍隊に入れて鍛え直さなければというバカな発言をする大人がまた出て来ます。（本来はそんな発言をする奴を鍛え直したら良いのですが、税金の無駄か！）府抜けた大人を無理に鍛えれば、どうなるか？ぐらいは考えなくても判ることでしょう？

のように親が賄賂を贈って我が子を腑抜けのままにしてもらうのが結論です。勉強が好きな子には進学して勉強をさせば良いし、能力のある子供には国が金を出してでも勉強出来る環境を用意してやれば良いのです。手先の器用な子供や商売に関心の有る子には専門学校で技術を習得出来る道に進ませてやることが大切です。現場ではたらいて地道に経験を積みたい子にはそのような道に進ませてやれば良いことです。

子供にも自分の進む道を１５歳までに決定させてやれば良いのです。途中で意思が変わってもまだこの歳なら変えることが可能なのです。悔いない人生は自分の意志を達成することです。親が子供の人生を勝手に決めつけることは控えるべきだと私は思うのですが。

成人になったら子供に自分の意志で決定させる（巣立ちさせる）のが動物としての親の勤めではないでしょうか？　巣立ち出来ない子供のことを人間社会ではニートと言うのですか？　巣立ちさせることが出来ないのは動物の親としては失格ではないでしょうか。

## 子供は母親に育てられる

２０１４年０２月２１日

結婚相手を決める時にはその母親を見て決めろと良く言われますが、私は少し疑問を持っています（私の苦い経験から?）。父親が何から何まで決めつけるような家庭では娘は父親の影響をモロに受けて育ちますから、子供にも亭主にも自分の父親と同じ態度で臨みます。母性の欠如した攻撃的な母親を最近は見受けられます。こんな母親に育てられたら男の子はイジケルか、グレルか、しかありません。女の子は母親と同じように攻撃的な女になります。近頃男言葉（それも下品な）で大声でしゃべる女の子を良く見受けるでしょう。　テレビでも時々元女プロレスの何とか言うのが品のない男言葉でガナッていますが、（コマーシャルまでも出て）あんなのです。食事中などに見たら食っているものが不味くなってしまいます。　全く最近は日本人までが観光地で大声でガナル品性下劣な支那人や朝鮮人のレベルまで落ちてしまいました。きっと、支那や朝鮮では昔から母親の地位が低いのでしょうね。

戦後、高学歴が就職に有利と言うことと、経済的に皆が豊かになり大学に行くことがアタリマエのようになり、駅弁大学（懐かしい言葉です）が乱立して大学にすすむものが圧倒的になりました。その割には、戦後「教養」という言葉が無視され、品のカケラもない先生方を輩出して来ました。大学を出ても受けた教育が「教養」まで高まっていないのですね。高校の受験レベルの知識で停まってしまっているのです。最高学府で学ぶだけの教養が会得されていないのです。私は戦後の教育の失敗は家庭で教育がなされなかった結果だと思います。躾や道徳、日本人としてのしきたりが教えられるのは家庭教育しかないのです。学校で先生の言うことを聴かない子供が増えているのは、学校に行くまでの親の教育がなされなかったせいなのですから。

ろくに家庭教育をやれなかった親が学校教育のせいにすることは本末転倒です。（日教組と言う癌のせいもありますが）

我が家の末永い繁栄を望むのなら母親が母性豊かに子供を育てなければなりません。母親が真剣に子供を育てるようになればニートや登校拒否やイジメも無くなるのは確かです。結婚して、子供を作ったら、自分の生活は犠牲にしても子育てに専念することは、動物でもやっているのです。親の役目は生んだ子供を自立させることだけなのです。動物の世界でも子供を育てるのは母親の役目なのです。そのために、女性として生まれて来たのです。昔から日本の女性は一家の中心だったのです。だから力があったのです。丈夫だし、長生きだし、男はかなわなかったのです。昔から女性が虐げられていたとか、戦後は女性の地位の向上とか、ジェンダフリーとか言い出してからですよ、女性の地位が下がり出したのは。平和、平和とお題目を唱えるだけでは支那や朝鮮に好き放題にされているでしょう。家庭の安泰があって、地域の安泰があり、地域の安泰が、日本の安泰に、日本の安泰が、世界の平和に繋がるのです。

戦後、団塊の世代は誤った教育を受け、子供たちを誤って育てました。（家庭での教育を放棄して、学校や塾に丸投げしました。）今の子供たちの親です。

親達は子供たちと一緒にもう一度正しい勉強をしてください。特に母親は、今ならまだ間に合いますから。今母親が手抜きしたなら日本の国は抜き差しならないところまで落ち込んでしまいます。

日本の国を取り戻せるのは政治家でも学者先生でもないのです。総ては母親の子育てにかかっているのです。

（と言って男として逃げているわけではありません、本当のことですから）

## 政府は道徳教育に力を入れると言ってるが?

２０１４年０２月１４日

世の中、道徳心のカケラも無い支那人や朝鮮人の攻撃を政府が反撃を出来ないのにわが国の子供たちに通り一遍の道徳教育を増やしても効果があるのか？　だます奴よりだまされる方が悪いと言うような価値観しか無い輩が隣の国から反日的マスゴミや日教組を使って日夜攻撃を仕掛けているわが国の学校でどれだけやれるか？　税金の無駄使いになるのと違いますか？　戦後日本の道徳心の低下は家庭から信仰心が奪われたことが原因と思います。神仏を信ずること無しに道徳教育をしても、絵に描いた餅、受験勉強のようなものだ。

「神さまが見ておられるよ」と言う言葉が子供たちの心に植え付けなくてはいくら道徳教育を学校でやっても、表面的には良い子ができても、真の道徳教育は出来ないと確信します。まして、道徳心を持ち合わせていない日教組に牛耳られているわが国の教育界では。

人間にとって最初に必要なことは信仰心です、神仏を敬い恐れる心を持たないでしつけや道徳教育など出来るはずがありません。信仰心を持たない人間のモロサが現実に現代社会に出ています。

日本最大のカルト集団（政党?）が経営する学校の卒業生が日本の中枢に深く浸透して来ていることでも証明出来るでしょう。信じ敬う対象を持つ者の強みを、例えその教えが反日的であり間違っていても信じて疑わない強さがあるのです。日本にも宗教教団の経営する学校は沢山あります、どれだけの学校が本当の信仰まで教えているのでしょう?疑問です。信仰心は学校では身に付きません、家庭での雰囲気で子供に伝えなければなりません、親や祖父母が無神論者を自慢するようでは道徳的な子供は育ちません。文部省も道徳教育は学校でするものだと勘違いしているのではありませんか?

# 議会だより

## 公開質問状

呉市議会議員　岡崎源太朗
H26年02月28日

広島市に対して公開質問状を提出しました。広島平和公園で原爆の説明をする語り部の中には、「日本が悪かったからアメリカに原爆を落とされた」と、説明する人がいます。

日本が戦争をやめたいとソ連に相談したところ、アメリカは慌てて原爆を落としました。それもウラニウム型とプルトニウム型の2発を落としました。脅すだけなら、一発で十分です。明らかに科学実験と共産主義者に見せつけるのが目的です。

語り部を正すために公開質問状を提出しました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

被爆体験伝承者養成研修講座について

松井一實広島市長殿

平成26年2月25日
〝平和〟市民の会
主宰菅英滋

私、菅英滋は、「被爆体験伝承者養成研修講座」を受講しています。
私は、受講を重ねるうちに幾つかの素朴な疑問を抱くようになりました。
その疑問は、私個人の個別的なものに留まらず、広島市民、広島市の平和行政全般に関わる
ことだとの思いに至り、ここに公開質問状とさせて頂きます。

Ⅰ　平成24年の募集に「被爆者の被爆体験や平和への思いを次世代に確実に伝えるため、被爆体験証言者の被爆体験等を受け継ぎ、それを伝える被爆体験伝承者の養成を行う」とあります。

①　被爆体験証言者の中には、「平和への思い」を「特定のイデオロギー」に置き換え、「そのイデオロギー」と抱き合わせで被爆体験を語る方がいます。
その場合、その受講者は、そのイデオロギーまで伝承しなくてはいけないのでしょうか?

②「イデオロギー」と言えば、大東亜戦争の意義を根本から見直し、あの時代の日本の立場を偏りなく認識し、改めてあの時点における原爆投下の不当性リト人道性を訴え、核兵器の廃絶を目指す立場もあります。
いずれにせよ「イデオロギー」は、「平和への思い」とは異質で、似て非なるものです。
「イデオロギー」の内容云々以前に、それを持ち込むこと自体が、「主催が広島市で、対象が一般市民の当該講座」の趣旨にそぐわないと思うのですが、如何でしょうか?

Ⅱ　修についてですが、被爆の実相、話法技術だけでなく、個別指導の際、市の職員は、受講者の伝承内容にまで踏み込んで指導をしています。

①　指導は、何に依拠してなされているのでしょうか?
それとも平和推進課被爆体験継承担当課の自由裁量に任せているのでしょうか?

②　広島市には、当該講座を含む平和行政全般に関わる指導要綱があるのですか?
また、それは開示して頂けるのでしょうか?

Ⅲ　平和〝市民の会は、開かれた市民による平和活動を標榜し、世界恒久平和を実現するために、「歴史から学ぶために歴史を学ぼう」と、近・現代史の検証を広島市民に広く呼び掛けています。
広島市は、米国の原爆開発から広島投下までの経緯を小冊子にまとめ、広島市民に配布する計画はあるのでしょうか?
以上、宜しくお願い申し上げます。

## 埼玉県議会文教委、朝霞高台湾修学旅行を問題視　指導徹底を決議

埼玉新聞　12月18日(水)

県議会の文教委員会（田村琢実委員長）は17日、県立朝霞高校の修学旅行に問題があったとして「県立高校の社会科教育の指導徹底を求める決議」を賛成多数で可決した。県教育委員会と県教育局に対し指導と改善を求める内容で、審議の過程では修学旅行に参加した全生徒の感想文提出を要求しており、一部の委員が「政治的圧力になりかねない」と異議を唱えたほか、共産党県議団が抗議した。

決議案は自民の石井平夫委員が提出。委員長を除く委員10人のうち自民5人、刷新と無所属の各1人が賛成し、民主、公明、無所属の各1人が反対した。

県高校教育指導課などによると、朝霞高校は昨年12月5日から3泊4日の日程で台湾で修学旅行を実施。2年生約320人が参加し、金の鉱山や博物館などを見学したほか、太平洋戦争の空襲で父親を亡くしたという游顕徳さん（男性）から当時の話を聞いた。生徒は修学旅行後、感想文を書いた。

16日から開催された文教委では、自民の白土幸仁委員や刷新の鈴木正人委員らが朝霞高校の修学旅行に関し、生徒への事前学習や「修学旅行のしおり」、現地学習を問題視。「事前学習で歴史的事実に疑念があるDVDを見せたり、しおりには歴史的事実と相反する未確定やねつ造の記述がある」などと指摘し、現地でも「反日思想を思わせる男性の話を聞かせ、しょく罪意識を植え付けた」などとした。

文教委は、修学旅行に参加した全生徒の感想文の提出を要求。それに対し、県教育局は各クラス代表8人の感想文をパソコンで打ち直した上、氏名が分からない状態で委員に提出した。白土委員は「原本でないと疑念が生じる」とし、「恣意（しい）的に選択することも可能」と全生徒の感想文の提出を求めた。自民の田中千裕委員も「現実に生徒たちがどのような影響を受けたのかが知りたい」と意見を述べた。県教育局は「学年便りとして掲載するため、作文として良くまとまっているものを集めた」と答えた。

全生徒の感想文を求めたことについて、公明の藤林富美雄委員は「（政治が）教育内容の細部まで関わることは学校や教員、子どもの自立性などをそぐ。8人分で十分に判断できる」と疑問を呈した。無所属の醍醐清委員は「朝霞高校が事前学習などを見直すとしており、あえて決議する必要はない」と異議を唱えた。

関根郁夫県教育長は決議が採択されたことについて「いろいろな立場の意見を子どもたちに示し、多面的・多角的に考える力を育てなければいけない」とし、修学旅行の在り方を検討することについては「そこまで考えていない」と述べた。

共産党県議団（柳下礼子団長）は17日、「委員が感想文の内容まで踏み込んで審議したことは生徒の内心の自由を侵すもので、断じて容認できない」とする抗議の談話を発表、決議の撤回を求めた。

## 「いじめ・不登校・自殺を防ぐ『予防教育』の重要性について」

名古屋市会議員　地方分権改革会　宇佐美汝久愛　H25-11-28

◎　以下、未定稿につき、引用、コピー等は固くお断りします。正式な議事録は3月13日現在、未だ出ておりません。遅い！　正式には近日中にはアップされるであろう、名古屋市議会の議事録より複写ください。

本年6月に国会で成立した「いじめ防止対策推進法」が9月に施行され、いじめ防止対策が各学校で取り組まれることになりました。

本市においては、本年7月に発生しました中学生の転落死事案に鑑み、すべての市立小・中・高等学校の児童・生徒を対象に、「学校生活アンケート」を実施し、必要とされる学校にスクールカウンセラーを緊急に追加配置することとし、11月16日付の中日新聞記事では、来年度、教員と同等の権限を持つ常勤のスクールカウンセラー（仮称）『子ども応援委員』を中学校に置く方針を固めたとありました。

「いじめではなく遊びだった」これは大津市の男子生徒自殺問題で関わった加害生徒3人の裁判での発言です。いじめは、仲間内でのじゃれ合いや「プロレスごっこ」、あだ名等から深刻ないじめに発展するケースが後を絶ちませんが、この法律の着目すべき点は、すでに起きているいじめだけではなく、「いじめを予防する」という視点に大きなポイントが置かれていることです。また、早期発見の処置として、更なる相談体制の充実の必要性を謳っていること。そして、いじめが犯罪行為として取り扱われるべきケースや、重大な被害が生じる恐れがあるときは、直ちに警察署に通報するとし、警察の介入を強化していることから、児童・生徒が加害者になることを未然に防ぐための積極的なケアも行なっていかなければなりません。今までは、いわば治療的な対処に躍起になっており、付け焼刃的な教育に終始することが多く、真の解決には至っていませんでした。本来、学校教育が目指すところは、いつでもどこでも、いじめを起こさない子どもの特性を育成することです。また、あらゆる子どもが心身の問題を抱える可能性があることを前提とした考えによるユニバーサル予防とω)□「いく同世ト・繊△垢戮討了劼匹發黨仂櫃法・梢佑箸隆悗鏐衙・鯢畸覆・藕箸砲弔韻気擦襪海箸僚斗ュ④・・靴討い泙后・・ω)こうした中、心の基盤づくりのための『予防教育』と呼ばれる教育プログラムが、今、注目を集めており、早速、他都市の先進事例を視察させて頂きました。徳島県教育委員会では、鳴門教育大学と連携し『予防教育プログラム』の導入が進められています。導入後、子ども達が喜々として授業に参加し、目標に沿って成長していく姿が明らかになっています。予防教育は、国内ではまだなじみが薄いのですが、米国などでは盛んな考え方で、フィンランドでは、既に90%の学校で実施され、いじめが減るなどの一定の効果を出しています。この鳴門教育大学の予防教育プログラムの開発と普及は、エビデンスに基づき、世界中の予防教育との連携も十分にされた画期的な『予防教育プログラム』で、「いのちと友情の学校予防教育」と呼ばれています。この予防教育が最終的に目指していることは、自律性と対人関係の育成で、いじめも、不登校も、自殺も、この自律性と対人関係性が備われば避けることができる問題であることから、『予防教育』の重要性がおわかり頂けるかと存じます。

そこで、教育長にお尋ね致します。本市においても、いじめ防止対策に本腰で取り組んでいく上で、いじめ・不登校・自殺を防ぐための『予防教育』の重要性についての（1）ご認識、並びに、本市における今後の「予防教育」への（2）取組みについて、お聞かせください。

最後に、徳島県教育委員会では、全国初の取組みとして、児童・生徒のたまり場になりやすいコンビニエンスストアと連携をして、いじめとみられる行為を見つけた場合に、教育委員会や学校に通報してもらう（3）協定を締結し、放課後に教員が見回りを行なう際は、各店舗に立ち寄って情報交換を行なう等、いじめ防止の体制をより充実させています。コンビニの各店舗には、24時間いじめ相談ダイヤル等の連絡先が書かれた『いじめ防止の啓発ポスター』が掲示されています。

（ポスターを見せる）

これが、そのポスターです。

「ストップいじめ。いじめは、犯罪です！いじめを見つけたら、身近な大人の人に伝えて下さい。」

「つながっています　心と心　人と人　ひとりで悩まずに相談して下さい」と書かれています。

ぜひとも、本市においても、コンビニエンスストアや量販店等のご協力を頂き、地域ぐるみでいじめ防止に取り組むべきだと考えますが、教育長のご見解をお聞かせください。

以上で、第一回目の質問を終わらせて頂きます。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

1　いじめ・不登校・自殺を防ぐ「予防教育」の重要性について

（1）「予防教育」の重要性についての認識

・子どもの心や体に深刻な被害をもたらすいじめをはじめとする予防教育については、次代を担う子どもの健やかな成長を目指す教育委員会にとって、取り組むべき重要課題と考えています。

そのために、いじめ防止等の啓発や相談・指導体制の整備など、これまでの対策に加え、今後は、いじめ等を生まない対策として予防教育の充実を図る必要があると認識しています。

（2）本市における今後の「予防教育」への取り組み

・　現在、教育委員会では、小学校・中学校における「いじめ防止教育プログラム」を作成しているところです。このプログラムは、議員ご提案のプログラムと同様に、「自信の育成」や「ソーシャルスキルの育成」などを行うもので、いじめ防止に加え、不登校や自殺予防にもつながりうるものと考えています。

このプログラムの作成後は、各学校において、いじめ予防等の取り組みを推進していきたいと考えているところです。

（3）コンビニエンスストアをはじめとする事業者との連携

・　コンビニエンスストア等の事業者との連携につきましては、国においても、いじめ防止対策推進法や「いじめ防止等のための基本方針」において、社会全体で児童生徒を見守る観点から学校関係者と地域、家庭との連携を求めております。こうした趣旨を踏まえ、今後、様々な機会を捉え、コンビニエンスストアをはじめとする事業者との連携について協力を求めてまいりたいと考えております。

# 男系継承の正体

H26-3-15 兵庫県宝塚市 阪本治男

皇位継承の伝統は男系主義なのか女系容認かという論争が激烈であるため、皇位継承を安定させるべき皇室典範改正が停滞している。男系・女系論争が泥沼化したのは、明治維新の過程で血統に関する常識が激変したことを誰も把握していないため、男系継承の正体を中途半端にしか説明できないことが主たる原因であだ。したがって、その常識激変過程を把握して論争するようになれば、男系・女系論争は整理縮小されていくはずである。そのことを順次論証したい。

1、血統に関する常識

現代の我が国では「子供は父母双方の血統を継承する」という知識が常識として定着している。しかしこの知識は十九世紀に精密な顕微鏡が出現し、卵子と精子が合体して妊娠すること、そして子供は父母双方から各々二十三個づつ同数の染色体を合計四十六個継承することが科学的に解明されて、血統は父子間も母子間も共に繋がっていることが判明したことによって、初めて獲得できたのであろう。

したがって、それ以前にこの知識を保有していたのは全知全能の神だけであって、人類は世界中の誰もこのことを知らなかったはずである。なぜなら、精密な顕微鏡を使わなければ知り得ないことを、精密な顕微鏡が出現する前に生身の人間が知り得るはずはないからである。

それゆえ、古代には父子間の血縁関係が分かりにくかったため、母子間の血縁関係を重視する場合が多かったと言われるが、ヨーロッパではアリストテレスが主張した「精液（生命力）が月経血を素材として胚を作りそこに霊魂が入って人間になる」という説が西暦紀元前から有力であった。それは新生命を発生させるのは男だという趣旨であって、父子間の血縁関係を重視していたのである。

古代イスラエルの最後の拠点であったマサダの丘は、西暦七十三年にローマ軍によって攻め滅ぼされたが、その古戦場が一九六三年に発掘調査されたとき、遺跡から出土した多くの土器片には、所有者の名と共に所有者の父との関係や、所有者が妻である場合は夫との関係が刻銘されていた（「マサダ」イガエル・ヤディン著　山本書店）。それゆえ、それらの土器片は、一世紀頃の古代イスラエルの社会が父子間の血縁関係を重視する社会であったことを証明している。

ところが十七世紀には、鳥の卵が孵化する過程を観察して「人間の新生命も卵子から発生する」と主張する者が現れ始めた。新生命を発生させる主役が男から女に変わり始めたのである。そして十九世紀になって、卵子と精子が合体して妊娠することが解明された。

他方、シナにおいては古代から「生命（気）は父から（娘ではなく）息子たちに伝わっていく」と考えてきたらしい（「月刊誌正論　二〇〇四年七月号」高森明勅　産経新聞社）。この思想が男系男子だけの男系継承文化を形成したのであろう。

そのほか開発途上国の中には、今でも畑に小さい穴を掘り、その穴を相手に若い男が性交の真似をして豊作を祈願する所があるらしいが、それは新生命を発生させる精液の神秘的な力に対する畏敬の念が今も根強く生き続けている、ということであろう。

それに対して我が国の場合は、十九世紀に発見された「卵子と精子が合体して妊娠する」という新しい知識が明治維新の激動過程で欧米から流入してきたので、それ以前は、西川勢津子先生によると「赤ちゃんは精子の中にいて女性の子宮の中で育つ」と思われていた時代が長く続き「腹は借り物」などといわれていた（「お産の智恵」西川勢津子著　講談社）。それゆえ新生命を発生させるのは男であって、女はその新生命を胎内で育てるだけだということになるので、血統は父子間で繋がっているだけで母子間では繋がっていないことになる。

時代小説などの中で「殿様の御落胤」という言葉が出てくるが、それは殿様の精子が女の胎内で育って生まれてくるという意味であって、卵子の重要な役割には気付いていないから、血統は殿様と御落胤（精子）との間で繋がっているだけだということになる。

大化元年の男女の法が「良民の男女の間に生まれた子はその父に付ける」と定めたのは、「血統の繋がりは父子間だけ」という当時の常識に基づいており、古代から父系社会の秩序を形成してきた「姓」の制度も同じ常識に基づいていたはずである。また東京大学名誉教授である我妻栄先生は、（「親族法」有斐閣）の中で「父権的家族集団の下では、父方の血族との関係だけを認める制度もあった」と述べておられるが、その制度も同じ常識に基づいていたのだろう。

しかし、母が胎児に栄養を与えていることは誰の目にも明らかであるため、韓国民法が、父方は八親等内血族、母方は四親等内血族を親族と定めたように、母子間には父子間よりも細い血統が繋がっていると考えた時期があったかもしれない。

2、皇位を父子間（男系）で継承

幕末以前は「血統の繋がりは父子間だけ」ということが常識となっていたので、皇位継承についても、先人たちは「天皇の精子（皇胤）を父子間で継承した者が即位するのが正統な皇位継承だ」と確信し、永年に亘り万難を排して皇胤の父子間（男系）継承を護り通してきた。そして皇胤の本体は男女どちらも半分づつ含まれるので、「皇胤を父子間（男系）継承して生まれた者は、男女どちらであっても皇位継承資格を取得する」と信じられていた。その点では男女同権だから、皇胤の父子間（男系）継承における女の地位とシナの男系継承における女の地位との間には大差があった。即ち、皇胤の父子間（男系）継承とは、男子だけで継承するという意味ではない。

しかし、女は新生命を発生させる精子を創ることができず男が創った精子を胎内で育てるだけだとされていたので、女の血統は次の世代に続かず尻切れトンボになると信じられていた。そのため、女帝は自分の子に血統を母子間継承して皇位継承資格を取得させることはできないことになるので、女帝の次にその女帝の子が即位しても必ず傍系の血統に移ることが女帝即位の前から確実に予見できた。ところが我が国では祖先を敬い生命の連続を尊重することが伝統文化となってい

るため、直系で皇位を継承することを優先してきたので（現在の皇室典範も直系継承を優先）、次は必ず傍系の血統に移ることが予見できる女帝の即位は常に後回しにされ、中継ぎ役を必要とするような場合だけ即位したのであろう。その結果、女帝は八人（十代）しか即位できなかったのである。しかし、血統を継承する側面で中継ぎ役的であることは、天皇としての功績の大小とは別問題であって、女帝が偉大な功績を残す場合もあった。

3、血統に関する常識の激変

ところが、幕末から明治維新にかけて「文明開化」という掛け声と共に欧米思想が怒涛の如く我が国に流れ込んできたが、その流れに乗って「血統は父子間だけではなく母子間でも繋がっている」という新しい知識も全国に普及していった。そのため新しい知識に基づく制度改革が精力的に遂行された。

「血統の繋がりは子間だけ」という旧い常識に基づいて古代から父系社会の秩序を形成してきた「姓」の制度は、もはや時代遅れだとして明治四年に廃止され、それと入れ替わって明治二十三年に公布された民法人事編及び明治三十一年に施行された民法親族編は、「血統は父子間・母子間双方とも繋がったいる」という父母系（双方系）血族主義の新しい知識を大幅に採用し、父方も母方も共に同じく六親等内の血族を親族と定めた。それは、日本国民の家族秩序を根本的に変革する壮大な立法事業であった。

それゆえ、従来の常識を劇的に変える民法典の編纂過程では、新旧の思想対立は激烈だった。その論争の中で血統に関連のある一例を挙げると、親が子を養育監護する権利を「親権」と規定するのか「父権」と規定するのかが論争の対象になった。親権には父権も母権も含まれるので、血統は父子間で繋がっているだけだと信じていた論者は「父権」と規定するよう主張したの対し、五箇条の御誓文の趣旨を体して知識を世界に求め、欧米から父母系（双方系）血族主義の知識を吸収した論者は「親権」と規定するよう主張したらしい。結局は後者の主張どおり「親権」と規定されて現在に至っている。

4、旧い常識の絶滅による混乱

明治維新の大規模な制度改革によって血統に関する常識が激変してから百年以上経ったので、今では「父は血族であるが、母は血族ではない」と信じている者は殆ど見当たらない。血統に関する新しい常識の普及に反比例して旧い常識は絶滅種と化したのであろう。そのため、現在、皇位継承問題を議論している者の中で、血統に関する常識が明治維新によって激変したことを踏まえ、新旧二種類の常識を使い分けて議論している論者は、私の知る限りでは一人もいない。それは女系容認派も男系派も同じである。

しかし、皇位継承は二千年前から血統に関する旧い常識に基づいて護り続けられてきたのであるから、皇位継承の伝統を理解するためには、旧い常識を基準として推論しなければ的確に理解できないはずである。にも拘わらず、現状は明治維新以後に生まれた新しい常識だけに基づいて神話時代から続いてきた伝統文化を説明する論者が多いので、的外れや説明不足の諸説が入り乱れている。

そこで、諸説のうち女系容認派については私が看過し得ない高森明勅先生と田中卓博士の論説を取り上げ、男系派については全般的に私が不満を感じていることを記述する。

ア、高森明勅先生の論説

拓殖大学客員教授である高森明勅先生は、養老令の継嗣令第十三「凡そ皇の兄弟皇子を皆親王と為よ。女帝の子も亦同じ」という規定について「女帝の子は男系によらず女系によって親王とする規定だ」と解釈しておられる（「月刊誌正論２００５年８月号」産経新聞社）。即ち「養老令は皇位の女系継承を容認していた」と主張しておられる。

しかしこの規定は、既に皇位継承資格を保有している皇親の中で親王身分を与えられる者の範囲を定めた規定であって、新たに皇位継承資格を取得させる規定ではない。皇位継承資格取得原因は血統継承という生物学的事実だけである。したがって、親王身分を与えられる者の中に女帝の子も含まれるという意味だけしかない規定を盾にとって「皇位の女系継承を容認する規定だ」と断定するのは、明らかに論理の飛躍であり根拠薄弱な誇大宣伝である。

それでも高森先生の誇大宣伝に従って「養老令は皇位の女系継承を容認していた」と仮定すると、女帝の子は母と血統が繋がっていることを根拠として皇位継承資格を取得するのだから、父は誰でもよいはずである。ところが養老令は女帝の子の父となるべき女帝の皇婿を四世王以上の皇親に限定したのであるが、このように限定した理由として高森先生は「女帝が臣下の有姓者と結婚するとその皇子は姓を帯びることになって皇統は断絶したと考えられるほかないから女帝の配偶者は皇族（親王・諸王）に限られる」と述べておられる（前記「正論」）。

しかし世襲制である皇位の継承資格を取得する原因は、ただひとつ血統継承という生物学的事実、即ち自然血縁だけであって、父系血族集団の肩書である「姓」を帯びるか否かという人為的又は事務処理的な事実によって皇位継承資格取得の可否が定まることはあり得ないから、養老令が皇婿を限定した理由として、「皇子が姓を帯びることを防止するため」と解釈するのは明らかに的外れである。にも拘わらずこんな的外れの解釈に陥るのは、千三百年前の旧い常識に基づいて制定された養老令の規定を、明治維新以後に生まれた「母子間でも血統が繋がっている」という新しい常識に従って「養老令は皇位の女系継承を容認していた」と解釈したため、無理に辻褄を合わせたからであろう。それゆえ、この規定の意味は養老令制定当時の常識に基づいて解釈すべきである。養老令制定当時（千三百年前）は、血統の繋がりは父子間だけと信じられていたので、女帝は自分の子に母の血統を母子間継承させて皇位継承資格を取得させることはできない、とされていた。それゆえ、女帝の皇婿を四世王以上の皇親に限定することにより、その皇婿の血統を女帝の子に父子間（男系）継承させて、女帝の子に皇位継承資格を取得させたのであろう（その結果的現象として女帝の皇婿は無姓者だけになる）。そうすれば皇位継承資格保有者という側面では女帝の子は男帝の子と同じことになるので、女帝の子にも親王身分を与えるため、「女帝の子も亦同じ」と規定したのであろう。

したがって、養老令が女帝の皇婿を四世王以上の皇親に限定した理由は、臣下の有姓者排除ではなく、皇位継承資格を保有する皇婿の血統を女帝の子に父子間

（男系）継承させて、皇胤の父子間（男系）継承を厳守するためであった。それゆえ、「女帝の子も亦同じ」という規定は、女帝の子を女系ではなく男系によって親王とする規定であるから、養老令は皇位の女系継承を容認してはいないのである。

イ、田中卓博士の論説

皇學館大學名誉教授である田中卓博士も高森先生とは説明のしかたは異なるが、やはり「養老令は皇位の女系継承を容認していた」と解釈する間違いを犯しておられるようである（「月刊誌諸君　平成18年3月号」文芸春秋社）。

また田中卓博士は「皇統に関して男系とか女系とか言い出したのは、西洋の学問を摂取した明治以後のことで、管見ではそれ以前に議論の対象になったことはなかったように思う」と述べ、さらに「父母で一家をなすというのが日本古来の考え方だから、それを男系と言っても女系と言っても差し支えなく」と述べておられるが（前記「諸君」）、その趣旨は「皇位の男系継承を厳守する伝統文化は存在しなかった」という意味であろう。しかし、そのような田中卓博士の解釈は的外れであって、幕末以前は総ての人が「血統の繋がりは父子間だけ」と信じていたので、当時は血統継承と男系継承とは同じ意味であった。それゆえ「母子間でも血統が繋がっている」と考える者は全然おらず、血統を男系と女系とに分けて考える者は誰もいなかったから、幕末以前に「男系・女系」という言葉が生まれることはあり得なかったが、それでも先人たちは万難を排して皇位の父子間（男系）継承を完全に護り抜いたのである。

ところが、明治維新の激動過程で欧米から「父子間だけではなく母子間でも血統は繋がっている」という新しい知識を教えてもらったら、すぐに維新政府の関係者が「男系・女系」と騒ぎ始め、女系の天皇にも即位して頂ける可能性を検討し始めたが、神話時代から始まった皇位継承に西洋思想を持ち込むのは畏れ多いと感じたのか、皇胤継承の重要性を強調した井上毅法制局長官の主張に従って、皇胤の父子間（男系）継承を従来どおり護り続けることになった。但し女帝の即位はそれ以後は認めないことになった。

しかし田中卓博士は、血統に関する常識が明治維新によって激変し、新旧二種類の常識が混在することになった経緯を理解できず、新しい常識だけが古代から現代まで一貫して変わることなく存続してきたと錯覚しておられるようである。そのため、田中卓博士は新しい常識だけに基づいて「男系から女系に移ってもまた男系に戻れる」という酔っ払い運転のような迷走解釈を堅持しておられる。

ウ、男系派の混迷

男系派の中にも血統に関する旧い常識に基づくことなく、新しい常識だけに依存して解説している論者が多い。そのため、これまで皇位が父子間（男系）で継承されてきた事実の客観的側面については、天皇歴代系図を示すなどの方法で「皇位の男系継承は、父方ばかり辿ると神武天皇に到達する」と詳細に説明されているが、先人たちがなぜ皇位の父子間（男系）継承を護り抜くために尽力し続けてきたのか、という主観的側面、即ち先人たちの心の説明は全然ない。

これでは仏の姿や形だけ説明して魂の説明をしないのに等しい片手落ちであるから、こんな説明では父子間（男系）継承の正体を総て明らかにしたとは言えない。したがって、「皇位の男系継承は我が国の伝統文化である」と怒鳴るだけで、その伝統文化が何故千五百年以上も完全に護り続けられたのかを説明しなかったら、中途半端で説得力は弱いから、結局は怒鳴り声の大きさで女系容認派と対決することになる。そのため、女系容認派の一部から「男系継承とは単なるフィクションである」と酷評されても、的確に反論できない状態であり、男系・女系論争は神学論争のような底なし沼に陥っている。

しかしそうなった主たる原因は、男系派が血統に関する旧い常識に基づいて父子間（男系）継承の主観的側面即ち先人たちの心を説明しようと努力しないことである。それゆえ男系派は血統に関する常識の激変過程を理解したうえで女系容認派と論争すべきである。

男系派が無視している血統に関する旧い常識とは「血統の繋がりは父子間だけ」ということであった。先人たちがそう信じていたからこそ、神話時代の状況は不明確だとしても、その後千五百年以上の永きに亘って、ただ一途に皇胤の父子間（男系）継承を完全に護り抜いたのである。

皇位継承の伝統を初めて法制化した養老令は、男帝のために側室制度を設け、多くの女性の協力を得て皇胤を確実に後世に伝えることにより、皇胤の父子間（男系）継承を永続させようと企図しておきながら、他方で女帝のためには後継者確保に尽力するのではなく、逆に女帝の皇婿を四世王以上の皇親に限定してその皇婿の血統を女帝の子に父子間（男系）継承させようと企図したのであるが、それらはいずれも「血統の繋がりは父子間だけ」と信じていたからである。

八人の女帝の即位も総て父子間（男系）継承の原則どおりであって、一人も例外はない。これも先人たちが「血統の繋がりは父子間だけ」と信じ切っていたことが前提となっている。

逆にもし先人たちが「血統の繋がりは父子間だけ」と信じていなかったとしたら、千五百年以上も皇胤の父子間（男系）継承を護り続けるはずはないから、父子間（男系）継承の伝統から外れた天皇は一人や二人に止まらずもっとたくさん即位されていたに違いない。にも拘らず、伝統から外れた天皇が一人も見当たらないということは、先人たちが「血統の繋がりは父子間だけ」と信じきっていたが故に、皇胤の父子間（男系）継承を完全に護り抜いたことを裏付けている。

したがって、男系派は父子間（男系）継承の源流を探し求めて神話時代まで遡上し、天照大神は女であるとかないとか大騒ぎしなくても、わずか百年余り前に発生した血統に関する常識の激変過程を把握したら、先人たちが父子間（男系）継承を護り抜くため、何故千五百年以上も壮大な努力を累積させてきたのか、という父子間（男系）継承の主観的側面、即ち先人たちの心を明確に説明できるはずである。そうなれば、底なし沼の男系・女系論争は終息に向かうだろう。

5、常識と科学的事実との不一致

以上のような先人たちの血統に関する常識は、科学的に解明された事実と一致しない場合もある。伝統文化の中には科学的事実と食い違うものがいくらでもあり得るのであって、「血統の繋がりは父子間だけ」という先人たちの常識は、「子供の血統は父母双方と繋がっている」という十九世紀に解明されて現代の日本国

民の常識になっている科学的事実と食い違っている。この違いを男系派も女系容認派も把握していないため、千五百年以上の永きに亘って先人たちが皇胤の父子間（男系）継承を懸命に護り抜いた壮大な努力を正確に理解することができず、議論をいたずらに泥沼化させているのである。

即ち、皇位の父子間（男系）継承とシナの男系男子絶対の男系継承とは似て非なるものであるのに、前者を後者の猿真似であるかの如く卑下する自虐史観に埋没したり、八人の女帝の即位は男系継承の伝統から外れていると誤解して、「女系継承も含まれていた」と強調したり、さらに「男系継承とは単なるフイクションである」と酷評して、先人たちの壮大な努力を冷酷に踏みにじる無礼者も出現している。また「養老令は皇位の女系継承を容認していた」という的外れの解釈が生まれるのも、両者の違いを把握していないからである。

それに反し、二十世紀後半になって解明されたＹ染色体上の遺伝子が、他の四十五個の染色体上の遺伝子と違って、父から男児にだけ継承されるという科学的事実は、「皇位は皇統に属する男系の男子が継承する」と定めた現在の皇室典範の規定とぴったり一致している。そして四十五個の染色体上の遺伝子は世代更新する度に盛んに組み替えていくので、十世代も世代更新すると多くの遺伝子は入れ替わるのに対し、Ｙ染色体上の遺伝子は殆ど組み替えをしないため、何十世代も世代更新しても同じ遺伝子が永続的に継承されていくことが科学的に解明されたので、Ｙ染色体論は皇統の永続性を顕示する「万世一系の皇統」という看板を護るための生物学的理論武装に役立つだろう。

それでも、幕末以前の伝統を尊重して、男系の女帝も即位できるように法改正されると、皇位とＹ染色体上の遺伝子とは離別する事態が生じ得るが、その場合は遺伝子の継承は途切れるのではなく、男系の女帝の在任中は他の男子皇族によって継承し続けられ、後日男帝が即位された時にまた皇位と再会するのである。八人の女帝が即位された時もそうなっていたはずであるから、男系の女帝が即位されてもＹ染色体上の遺伝子の継承が途切れる惧れはない。

ところが、田中卓博士は前記「諸君」の中で「Ｙ染色体が男性だけに受け継がれるなどということは、極く最近の生物学の発見で、古来の日本の歴史や伝統とは何の関係もない」とぼろくそに批判しておられる。しかし、生物学の発見は最近であっても、Ｙ染色体上の遺伝子は人類誕生当初から何百万年も継承されてきたのだから、全人類の歴史や伝統文化の形成に決定的な影響を与え続けてきたのである。そして皇位継承の絶対条件である血統継承は間違いなく生物学的事実であり、その生物学が母子間でも血統が繋がっている事実を十九世紀に解明したことに基づいて、田中卓博士が信じておられる女系継承容認説が生まれてきたのである。にも拘らず、田中卓博士が自説の成立根拠は生物学の発見であるということを理解できず、短絡的錯覚を堅持して迷走しておられることは前述したとおりである。

遺伝子の研究は二十世紀後半から活発になり、新しい発見が次々と発表されているので（Ｙ染色体上の遺伝子もその中のひとつ）、やがて血統に関する現在の常識に激震を与えるような遺伝子理論が現れるかも知れないから、皇位継承の絶対条件である血統の意味を正確に理解するためには生物学の知識は不可欠である。とにかく、Ｙ染色体上の遺伝子は血統の永続性を確保する決定的要素であるから、皇位継承とは深い関係があるのに、田中卓博士がＹ染色体論をぼろくそに軽蔑しておられるのは、学者が執るべき態度とは思えない。

6、今後の皇位継承

問題は以上のことを踏まえて、日本国民は今後どう対処すべきかということであろう。血統は母子間でも繋がっていることが十九世紀になって判明したから、女系の天皇が即位されても直ちに皇統が断絶するとは言えない。しかし血統中の永続的要素であるＹ染色体上の遺伝子の継承は、女系の男帝が即位されたら確実に遥か遠くの傍系に飛び離れるはずであり、さらに完全に途切れるかも知れない。もし途切れてしまったら、その後は血統中の短期的要素ばかり繋ぎ合わせることになるだろう。ところがそんなことよりももっと重要なことは、先人たちが科学的には少し間違いながら「血統の繋がりは父子間だけ」と確信し、皇胤の父子間（男系）継承を護り通すため、千五百年以上の永きに亘って壮大な努力を累積させてきたという事実を、先人たちの子孫である現代の日本国民がどう受け止めるべきかということである。

男系派と女系容認派の錯綜した論争によって皇位の父子間（男系）継承が変な形に歪められたり、男女平等原則に反するという理由で、皇位の父子間（男系）継承という我が国の最重要伝統文化が無惨に破壊されてしまったら、先人たちはあの世で激怒し、そして嘆き悲しむだろう。科学的事実と合致しない伝統文化はいくらでもあるのだから、祖先を敬うという我が国の伝統精神を大切にするのであれば、血統に関する旧い常識に基づいて、皇位の父子間（男系）継承を千五百年以上の永きに亘って完全に護りきった先人たちの思いや熱意・執念・怨念など先人たちの心を、今後も護り続けるべきである。そのためには側室制度復活は無理だとしても、旧宮家の復活や旧皇族男子との養子縁組などの方法により、皇胤の父子間（男系）継承を護り通さなければならない。そして女帝の即位を復活させるのであれば、皇胤の父子間（男系）継承を厳守する特別のルール作りが必要になる。また、皇位の父子間（男系）継承には世界無比の無形文化遺産的な側面も含まれている、という国際的な意味も重視すべきである。

しかし、皇位の父子間（男系）継承を護り通すため、最大限努力しても、それを護りきれない時期がいつか到来するかも知れないが、その時期がくればその時代の関係者が女系継承も含めて解決策を考えたらよいのであって、父子間（男系）継承が完全に行き詰まれば、先人たちは「もはやこれまで」といって諦めてくれるだろう。ところが現代の日本国民が最後まで努力を尽くさず、取り越し苦労をして「今のうちに女系の天皇も即位できる可能性を確保しておくべきだ」と言って慌て出すのは余計なお節介であり、我々の大切な子孫である将来の日本国民に対する最大の侮辱である。それゆえ、後に続く者たちが善処してくれることを信じて、今はただ一途に皇位の父子間（男系）継承を護り抜くために全力を尽くすべきである。

## もうひとつの大阪市長選
H26-3-11　M情報　増木重夫

橋下大阪市長は2月7日に辞表を出した。ところが自民、共産、民主、公明は候補を出さないという。ということは橋下氏の無投票当選。これだけはあってはならない。誰も出ないときは我々からだれか出そう。絶対選挙に持っていこう。告示日まで1ヶ月。急遽「選挙を実現する会」を設立。候補の人選、資金集め。そして公選法の研究。

我々はH、M氏に出馬を頼んだ。下野している活動家で、橋下と議論できる論客は彼しかいない。そして、資金集め。供託金２４０万。はじめ東京都知事の３００万と勘違いし、３００万を集めた。勘違いで６０万円浮いた。

「ドブに捨てることになりますが出してもらえませんか。」と知り合いを頼みまくった。むちゃくちゃなお願いだ。しかしなんとか集めた。

政策は、

① 橋下氏の大阪都構想は手ぬるい。

② 自民、共産、民主、公明のやり方。これが大阪名物『談合』だ。選挙費用６億の無駄遣いなどとマスコミは言うが、これは民主主義の否定だ。

〇〇手当や生活保護等、そういう費用より選挙を優先させないといけない。〇〇手当や生活保護を払うか払わないか、いくら払うかを決めるのが選挙だから。〇〇手当や生活保護等ありきではない。

キャッチフレーズは

「この大阪をまた利権まみれの暗黒の街に戻しますか、それとも子供たちのため、明るい未来に挑戦しますか。」

それからが大変で、元大阪市北区長の中川氏は出るとかでないとか、2転3転。

２月２６日の選挙説明会に潜入。他陣営もいっぱい来ている。２０名ほどいたらしい。皆、多かれ少なかれスパイだろう。マック赤坂氏は京都府知事選に出るとか情報が乱れ飛ぶ。吐き気が止まらない。これが「胃潰瘍」の初歩なのか。

そして公示日の９日。内ポケットに供託金２４０万円を持って選管近所で待機。

橋下市以外だれも出なかったら、即法務局へ供託。それをいつするか。

朝一に橋下氏以外に、マック赤坂氏、二宮氏が立候補を届けた。しかし、９日の５時までなら辞退できる。二人が辞退したらアウト。選挙は無投票。

そして午後４時、さらに藤島氏が立候補を届けた。４時に届けて５時までに辞退はないだろう。法務局まで３０分はかかる。４時半、我々は今回の作戦の終結を確認し、５時を待った。全員辞退することはなく選挙は成立。

我が人生最高に楽しい２０日間だった。

仲間の一人が言う。２４０万円で、後日、後悔はしたくなかったから。

ハ・シ・モ・ト～～～！　辞表書くなら周りの迷惑考えろ～～～～～！

## 編集後記
H26-3-12　M情報　増木重夫

### ナメンテンノカ！　大阪府西警察署

１２月１５日（日）Jolyこと中谷良子が主催し、韓国大統領の日本に対しての諸々の発言に対し、抗議のデモを御堂筋で行った。主催者から「手伝え！」と要請を受け、私も指揮車の提供と運転。

当日、新町南公園２時出発。我々は1時半に集合してミニ集会を行い、出発時刻を待った。ここは大阪府警西警察署の管内。２時が近づくにつれ警備のお巡りさんも続々集合。そしてそこへミニパトがすっとやってきた。なにかの連絡だろうと気にも止めなかった。

さて、時間だ。お巡りさんの指示で先導パトカーの後ろにデモ隊が並ぶ。

なんと、例のミニパトが先導車だった。２０年間デモは１００回では利かない。しかしミニパトは初めて。ひよこの後ろにアヒルが並んでいるようで、デモ隊全体の迫力は半減。おまわりさんは「今日はこれしかなかった。勘弁して。」と恐縮しきり。しかし、シュプレヒコールにもどうも力が入らない。次回からは人身御供で２、３人捕まえてもいいからミニパトだけははは勘弁してよ。

## 活動資金ご協力のお願い

先ずは、平素より私どもの活動に力強いご支援を賜り心から御礼申し上げます。このレポートにもありますように、私どもは子供達に誇りある国を残すため、日々命がけで戦っています。ところが問題は活動資金。今まで以上にがんばります。何卒資金のご協力を伏してお願い申し上げます。

※ この、M情報機関紙は新聞の形態をとっていますが、「活動の報告書」です。特に「購読料」は設定していません。カンパをよろしくお願いいたします。

〇 カンパ金の主な使途は下記団体の、
・活動の資料等の発送費・道路、公園使用申請料・交通費、通信費・資料、ビラ等の制作費・備品購入費等

〇 M情報がサポートしている主な団体
・ＮＰＯ法人百人の会　・救う会大阪
・秋田美和さんを救出する川西市民の会
・米国に原爆投下謝罪を求める会
・スパイ防止法の制定を求める会
・日教組の違法行為を追及する会
・竹島を奪還する会・関西
・靖国神社に眠る御霊に感謝する会
・大阪の公教育を考える会、他

◇ 前記口座、または同封の郵便振替にてご協力ください。

【ご支援等の口座】
郵便振替 00980 8 245547 MASUKI 情報デスク
三菱東京UFJ銀行 千里中央支店 044349 普通 増木重夫

## 原稿・同封資料の募集について

弊会『M情報活動報告』は現在のところ毎月全国約５千（目標１万）部発送しております。掲載ご希望の論文、情報等ございましたらどんどん表記事務所までお送りください。また、弊紙は郵メールで発送しています。重さ制限は５０ｇです。まだ余裕がございますので、資料等の同封が可能です。ご相談ください。

## 諸情報のメール配信について

『M情報』では、日々、全国各地の仲間から、または情報収集の専門家から情報が送られてきます。それをメールで転送します。内容はどこよりも詳しく多種多様。「量が多過ぎとお叱りを受けるのですが、試しに一度受信してみませんか。ご不要でしたら即停止いたします。要領は次のアドレスに「メール希望」と空メールを（発信名義「ＮＰＯ法人百人の会」）。
h100prs@oregano.ocn.ne.jp